第2部

【報告への質疑応答とコメント】

財源、家族の理解…etc.

■質疑応答

野山　どうもありがとうございました。会場から提出いただいた北川さんへの質問を整理しますと、日本語教室への参加を許してもらう、あるいは理解してもらうために家族に掛け合う、ということでしたが、そのためにどんな工夫をしているかというのがひとつ。さらには教室を支えるのにどのくらいのお金がかかっていて、それは県や地域、市からどのぐらい援助してもらっているのかということです。

北川　まず家族の理解を得るために、中国語、英語、韓国語、それにロシア語版も作ろうと思っていますが、その案内状を作成して、役所の外国人登録窓口に置いてもらっています。それを見た家族の方が電話をかけてきますので、来週の火曜日に奥さんと、あなたかおじいちゃんか、おばあちゃんでもいいから、家族の人に必ず来ていただかなければ受け入れられませんと言います。1カ月間は見習生扱いです。さらにご主人にどうして日本語を学ばせたいんですかと聞きます。そうすると、覚えてもらわないと困るからと。困るということは、あなたも困るけど、奥さんも困るでしょうと言うと、だから私も本当は中国語とかタイ語とかを覚えればいいんだけど、なかなか。ということは、奥さんの方に大変なことを強いるわけですよねと言うと、そういうことになりますねと。じゃあ、それを私どもがカバーしますので、申し訳ないですけど、入れるのであれば、まず、月500円をいただきますと。これはすべて先ほどの行事のために使うお金です。

　最初の時点で顔を見てそういう話をしていますので、何か問題があったら、いつでも私の方に連絡をくださいと言う。コトが小さいときに相談されるくらいの間柄をつくっていくという必要性をとても感じています。

◆ 財源をどう確保するか

お金に関して、最初は一銭もありませんでした。残留孤児の日本語指導からやっていました。福祉の方に、補助金をもらえないかと聞いたら「出せない」という。その時点では何もなかった。今は厚生労働省が残留孤児にいろいろな支援をしていますが、最初のころはほとんどカンパでした。でも3年か4年やったときに、県の事業として、県内に10カ所の日本語教室をつくりました。これは形だけだったのですが、私はとてもよかったと思っています。ただまずかったのは、そこに定年退職の先生だけを入れようとした。日本語指導イコール国語指導だと思っていた。それで、結果的に崩壊していった教室もいっぱいあります。私はその前から、たまたま日本語教室をやってきていたので、学校の定年退職をした方と組んで、日本語教室をやってもいいですよと。行政が認める教室、県もバックアップしてくれる教室ということで、生徒が増えました。やはり行政がバックアップしている教室といったら、安心して入れられる教室ということになります。それが、地方で教室をやっていく中で一番必要なことだとすごく感じました。そして、そのことによってお金もつくようになりました。ですから、最初の3年間の県の事業は、私個人にもらうお金でしたが、全部教室につぎ込みました。その後、県の事業が終わって市の事業に変わったときに、主にコピー代などの事務経費に150万円の予算をつけてもらっています。それに指導者の人たちとボランティアの人に、500円ですけど、交通費をもらえる。それよりも増やさなくていいから、絶対に削らないでくれと。それがダメならやめますと、交渉をしかけています。

藤田　今、北川さんが話した1995年からの秋田県からの具体的な金額、それから当時教室でかかっていたコピー代などは、中国帰国者センターの『紀要8号』の私の論文にあります。私たちボランティアに支払われた報奨費も含めて記載しています。ウェブ上で帰国者センターの『紀要8号』を検索していただければ読めますので、具体的な金額を知りたい方はそちらをご覧ください。

野山　ありがとうございます。北川さんにはまだいっぱい質問があるのですが、後でまたします。次は、池田さんへの質問です。困ったときや、来日してからつらかったこともたぶんあったと思います。そういうときに、相談相手、話を聞いてくれる人は誰でしたか。

池田　中国では、自分が話したいことは自分で話せます。日本では、話したいことも言葉が分からないから話せない。最初は分からないときは、たまにうちに電話をして、悩みとかを中国の親に言いました。兄弟とか友達に相談したり。だん

だん日本語を覚えてきて話ができるようになったら、主人や家族、たまに北川先生も相談の相手をしてくれるし。今は、やはり主人、こんな感じです。

野山　次は藤田さんへ質問です。それぞれの方たちに、かかわってきた人たちに変化があったことがよく分かりました。さらにもう少し大きく、共生のまちづくりという観点から見ると、能代で今どんなことが起きてきて、今後どういうふうに動いていくのか、何か言えることがあれば聞きたいということです。

◆ 一緒に暮らす視点で見てゆく

藤田　盆踊り大会の関連について紹介します。あるとき、ALTの人たちから、何か行事があるとお客様として招かれるだけではつまらない。そのうちに自分たちで自分たちの行事をつくりたいというような発言がありました。そうした声を吸い上げるところからスタートしました。当初の会場は県立大学の木材加工研究所の横にあった、町の真ん中から離れたところで行事をしていました。97年からずっと教室のメンバー、参加者、学習者のご主人や家族など教室の関係者だけで行事をやってきましたが、04年からは、市役所の脇にある町の中心部の公園で行事をするように変わりました。私は毎年参加していますが、この1年での変化ということで感じた部分を話したいと思います。

以前は、日本語教室に関係のある人やボランティアとして踊りのサークルの方々、お祭りに興味のある人、バンドに興味のある人、そうしたあるトピックに興味のある人たちが来ていました。ところが、今年参加していた人たちの話を聞いてみると、太鼓の音が聞こえてきたから、何かお祭りをやっているかなと思って来たという声を耳にしました。いろいろ聞くと、最近町内の盆踊り大会というのは、町中の人口が減ってきて、どんどんお祭りも減っている。商店も郊外型になっていて、中心部はシャッター商店街になっています。以前は町内の行事がいっぱいあったのに、本当になくなっていて、こういう外国人の行事だと知らなかったと言っていました。大会に来たことによって、こんなふうに能代に暮らしている人がいるんだということに初めて気づいていく地域の人々が増えてきている状況です。

北川さん自身も、先ほど新聞にいろいろな情報を流しているという話をしていましたが、地元の新聞社の方が、横浜国立大学で日本語教育を学んだ方で、日本語教育事情や外国人の子どもたちのことなども分かった上で記事を書いてくれているので、それによって地域住民の教室を見る視点が変わってきてはいます。ですので、小さい変化かもしれませんが、地域にともに暮らしているという視点に、

外国人だからというよりも、地域にともに暮らしている人たちなのだという視点に変わってきているのかな、と感じています。

野山　最後の質問ですが、北川さんの教育内容の話です。聞く、話すより、どちらかというと読む、書くを先に教える、ということですが、それはなぜなのか。具体的にそれでどんな効果があるのか、もう少し詳しくお聞きしたいという質問です。それと、それに関連してですが、生きるすべを教えるところだと言われていましたが、何を身につけているのかということを、もう少し具体的に、という質問です。

◆ 教えながら教わっている

北川　能代で20年暮らしているフィリピン人がいます。とてもきれいな方言を話しますが、読めないし、書けません。「お母さんは頭が悪いの？」と子どもに言われるそうです。「ひらがなも書けないお母さんなの」と言われる、と私の前で泣いて訴えたことがありました。書いて読むということは、すごくレベルの高い人と見られるのだなと思ったことがひとつ。それから、最初に教えるのが、50音の読み方と書き方、長音、撥音、促音の発し方。「あいうえお体操」から始まって、促音、長音、それからイントネーションの勉強とかをするやり方が効いていると思います。

それから、会話形式を教えるのですが、どんなに会話を勉強しても、教科書のようにはいきません。やはり現場で実習のようなことをします。バス旅行をして、ボランティアの人を生徒たちの中に1人入れ、お店での食事の注文などでもすべて外国の人にやらせる。そういう場を設けることによって、実際にはこうやって使うんだ、ということを体験を通じて覚えてもらう。「楽しい」という形容詞をいくら習っても、どういうときに楽しいのかが、楽しませなければ、分からない。

野山　行事そのもので、人が生きるすべを身につける、という話ですね。

北川　そうですね。教えていながら、私どもが生きるすべを教えてもらっているという部分があります。教科書で教えるのは簡単なのです。でも、勉強をして、例えば留学生とか大学生のように100点を取るとか、そういうもので終わるものであればそれでいいのかもしれませんが、この人たちは生きるすべが欲しいのです。それに言葉が必要なのです。それと結びつけるのには何かというと、ただ単にきれいな言葉を話すのではなくて、臨機応変に答える姿勢だとか、対話する言葉遣いとか、日本の中で生きていくすべです。